

2006. 7. 30

No. 140



編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.plala. or.jp
郵便振替
「銀河通信」02740-7
-56535
(6号分1,000円)

銀河通信が18周年を迎えました

やっと北海道も夏らしくなりました。あっという間の2ヶ月でした。みなさまはお元気でしたか？

この7月、おかげさまで銀河通信が18周年になりました。いつまで続けられるだろうかと思うこともしばしばですがここまで来たら、150号まで頑張ろうと決意しています。

退職してから、山岳会に入ったことも大きな転機でしたが、今年の春から北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会の事務局長を引き受けたり、山岳会の自然保護副委員長など実力以上の大任を周りの仲間に支えられながら頑張っています。7月23日に57歳の誕生日を迎えました。

山を始めてから、あきらめない粘り強さが身についたように思います。家族も、私が山に行けばなんとか食事の支度をしなければならぬので自立？に役立っているかなとも思います。

映画や本からも学ぶことはたくさんあります。私なりに書くことで自然や平和の大切さを伝えていけたらと思います。

女優の宮本信子さんは50代になってからジャズを歌うようになったとか。それもプロなのでさすが。 「楽しいことは生きていく上でとても大切。もう年だからとか、失敗したらどうしようなんて思いません」と語っています。素敵ですね。私も見習いたいと思います。

心新たに通信を書いて行きたいと思います。これからもご愛読ください。



7. 22 山の仲間と空沼岳山頂で
写真提供 坂ロー弘さん



6. 25 摩周湖をバックに

みな子の花パトロール日記

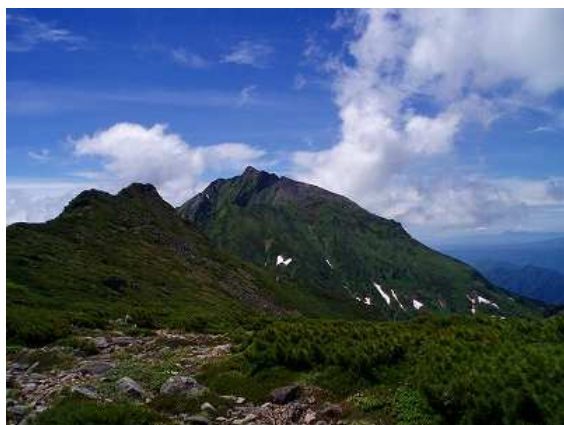
日本山岳会北海道支部は大雪山系と十勝岳連峰の高山植物の保護パトロールを道から委託を受けました。会員にお願いするだけでなく、自らも積極的にパトロールしなければと例年になくたくさん山の山に登りました。丁度、花のピークで、たくさんのお花に出会いました。氷河期の生き残りの高山植物がいつまでも咲き続けられる環境を守りたいと強く思いました。

天を突くニペソツ山 7・3

糠平のキャンプ場で前泊して、7月3日憧れのニペソツに登ってきました。

佐藤謙先生が、パトロールするなら、ニペソツ、平山、白雲、富良野岳をと提案されていました。友人を誘い3人で登りました。

糠平の登山口に向かう国道から、ニペソツが朝日にあたって厳かにそびえておりこれから登る山にわくわく。登山口を6時に出発しましたが、すでにマイクロバスの団体さんや、本州からの個人など、5組ぐらいはすでに入山。携帯トイレをどうぞ」というボックスがあったので開けてみましたが、すでに空でした。



丸太橋をわたり、いきなり急斜面に取り付くが、風倒木が、横たえられていて足元が滑るので大変。暗い森を登りきるまでは、見通しが悪い。天狗のコルに8時10分着。前天狗には9時半に着きました。ここまでは、ガイドにもあるように、ハイマツのトンネルをくぐって進みます。時折、ナキウサギの音がしますが姿を見ることはできません。前天狗からは、素晴らしい眺望が待っていました。岩峰が鋭くどっしりとしたニペソツが目の前にありました。オプタテシケやトムラウシ、旭岳などの大雪山系の雄大な風景に感激です。

頂上に向かって20人近くの団体が歩いているのが見えました。前天狗で休んでいた方に聞くと東京からのツアー

一だといひます。

私たちは、高山植物の監視をしながらですから、すぐには頂上には向かわず周辺の植物を観察しました。ロープが張られていますが、写真を撮るためにロープの中に入ったばかりの跡がありました。花がまわりにたくさん散っているのです。

岩にはイワウメがびっしりと咲いていました。エゾツガザクラ、エゾコザクラ、エゾノハクサンイチゲメアカンキンバイ、ミネズオウも咲き始めていま



す。そこから1時間半かかって頂上に。11時半。途中で下山してくる、東京のツアーとす

れ違い ました。18人の団体ですが、若い男性ガイドが先頭と真ん中と後部にいてしっかりサポート。

60代後半の女性と男性。その体力に圧倒されました。私もまだまだ頑張らなくっちゃと励まされました。

眼下に糠平湖、2年前に登ったウペペサンケが見え懐かしい。頂上で写真を撮ろうとしたら三角点の標柱が倒れていました。ツアー客が下山した後で静かな山頂を楽しみました。下山は3度の登り返しがありつらかったです。4時半下山。



花の名山 大平山 7. 8

7月8日、近所の山仲間7人で車2台に便乗して札幌を朝4時に出発し、島牧の大平山に登りました。

私は3度目の大平山です。前日の雨で登山道は滑りやすく尻餅をつく人もいました。曇っていた空も青空になり、第1ピークを過ぎる頃から、たくさんの花たちが迎えてくれました。イブキトラノオが涼しげ。ミヤマキンポウゲの群落、第2ピーク付近は、テガタチドリや、ムラサキモメンヅルがたくさん咲いていました。貴重種が多く、落石の危険も大きかった、第2ピーク超えのルートは、付け替えられ歩きやすくなっていました。お花も十分に楽しむことが出来ます。

頂上直下から、道をふさぐほどの藪を越えて進みます。やぶ蚊の大群に虫除けスプレーはたいして役にはたちません。



カノコソウ



2週間前の摩周岳のやぶ蚊に食われた手足が、まだ直らないのに、さらにの追い討ちです。仲間のKさんは、目の周りを刺されて腫れていました。

大平山も急峻な山ですが、二ペソつより楽に感じたのは登ったことのある山でルートを知っているからでしょう。

茹でて持ってきた、ソーメンが。ネギ、おろし生姜つきで美味しかったです



エゾノハナシノブ

オオヒラタンホボもまだ咲いています。ミヤマハナシノブという美しい名前の花を初めてみる事ができ感激しました。アポイカラマツも咲いてました。私の花？ミツモリミミナグサもたくさん咲いていて嬉しかったです。

タニギキョウ、サイハイラン、レイジンソウ、タニウツギ、イワオウギ、シロウマアサツキ、ホソバツメクサ、ウツボグサ、イワオトギリ、トウゲブキ、カノコソウ等、たくさんの花に出会えました。



トウゲブキ

頂上には2組の登山者だけ。静かな山でした。

タイム	登山口	8:40	尾根上	10:10	800
M地点	11:00	大休止	頂上	13:50	下山開始
	14:15	登山口	17:25		

宮内温泉で汗を流し、島牧ユースに宿泊して、海の幸、山の幸の料理に感激。翌日島牧のお祭りで、ウニ、あわびが新鮮で美味しかったです。賀老の滝を観光。不思議な炭酸水、ドラゴンウォーターも飲んできました。

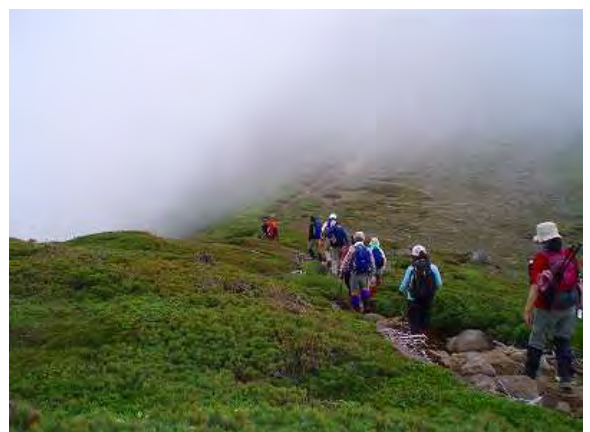


富良野岳～上ホロカメットク山

登山教室のアシスタントとして7月15日に前泊して16日、十勝岳温泉から富良野岳～上ホロカメットク山を12人で縦走しました。

天気予報が外れて、前日はカミホロ荘の露天風呂から北斗七星が輝いていました。

16日早朝、カミホロ荘から、富良野岳がどっしりとした姿を現しました。5時20分、登山口はすでにたくさんの車が並んでいて、大型バスも2台。上ホロ分岐まで快調に進みます。ここを過ぎた頃から次から次に現れるお花に足が止まります。ヨツバシオガマのピンクが可愛い。イワヒゲの群落。エゾツガザクラとアオノツガザクラ、コエゾツガザクラが混生しているのも見事でした。エゾヒメクワガタやエゾツツジも今がピークです。コイワカガミやエゾリソウも見ましたが少なくなっているのは残念でした。



緑の山、富良野岳から三峰山まではお花を楽しみながらゆっくり歩きました。チングルマ、ハクサンイチゲが一面に。ミヤマリンドウやイワギキョウ、ハイオトギリがお花畑を彩っていました。キャップをつけないストックによる、土の掘り返しが気になりました。いつまでも美しいお花畑を守りたいですね。

三峰山は、振り返ってみると大きくて迫力があります。上富良野岳に登る手前に高山植物を見ようと登山者がつけた踏み分け道がついていました。登山道からはずれないマナーを守って欲しいですね。上富良野岳から、上ホロカメトックには、ザックをデポして15分で登りました。



コイワカガミ

前方に緑の富良野岳が、上ホロからは荒々しい安政火口と形のいい十勝岳が見え、縦走コースの雄大さ、景観の素晴らしさに感激しました。私は昨年9月に同じコースを歩きましたが、花の素晴らしさは今回最高でした。

途中、雷がなって、雨にも少しあたりました。ところが、時間があるからと安政火口を見学して、さあ下山というときに、バケツをひっくり返したような雨が降り出し、カッパは着たものの全身ずぶ濡れになりました。

山中で、山仲間のHYMLのメンバーと会うなど、山での出会いが嬉しかったです。

緑岳～白雲小屋～白雲岳～小泉岳～赤岳～緑岳とニセイカウシュッペ 7. 24～26

7月24日、旭川で友人と待ち合わせ3人で高原温泉に向かいました。11時半出発。見晴台近くで鹿の親子が登場。人慣れしているのか、シャッターを向けても道をふさいで逃げようとしません。第一お花畑ではエゾコザクラとチングルマの群落が素晴らしい。友人は花の写真を撮るのに大きなカメラを背負ってきて、しばし写真撮影を楽しむが、緑岳への急斜面をジグを切りつつ高度を稼ぎます。厚い雲が覆っていて眺望はありません。

緑岳に15:20到着。雨が降り出し夕方までには白雲小屋に着きたいのでここからは少し急ぎ小屋に16:15に着きホッとしました。すでに小屋は満杯。60人は泊っていたと思います。濡れた雨具を乾かし、すぐに食事の準備です。この日は豚シャブの豪華な夕食になりました。



ニセイカウシュッペから東大雪を望む



キバナシオガマ

思いザックをおろして安堵したのか、7時には就寝。

25日は風が強く寒いほど。6時に小屋を出発。白雲分岐でザックをデポして白雲岳に向かいます。巨大なクレーターが広がり、どうしてこんな山にと自然の不思議さに驚きます。岩礫の頂上を往復して今度は赤岳に。チョウノスケソウをみつけましたが、数は少ないです。キバナシオガマやホソバウルップソウがたくさん咲いていましたが、コースロープがなく登山時には、踏み込みが心配です。目の前で盗掘する人はいないでしょうが対策が必要でしょう。1週間前に同じコースをパトロールした人からも同様の感想が寄せられました。小泉岳から緑岳にかけては花の尾根道でエゾミヤマツメクサやミヤマリンドウ、コマクサやクモマユキノシタ、エゾタカネスマレなどたくさんの花に出会いました。

緑岳付近で強風が吹き荒れ、岩場で転んだら大変と、緊張を強いられました。高原温泉への下山は13時でした。

26日、ニセイカウシュッペの登山口は9時35分。2日間の重いザックを背負っての登山に比べたら、登りも緩やかでとても楽に感じました。昨夜の雨で、ぐちゃちゃの泥んこ道で景色も開けず単調です。1500mを超えると一気に展望が開けて表大雪が一望できます。でも高度をあげるほど雲が厚くなり、頂上からは何も見えなかったです。チシマノキンバイソウの群落が素晴らしかったです。

登山口にはトイレがないため、ティッシュが散乱。景観を損ねています。ここも人気のある山ですから、ティッシュの持ち帰りの啓蒙活動が必要だと思いました。



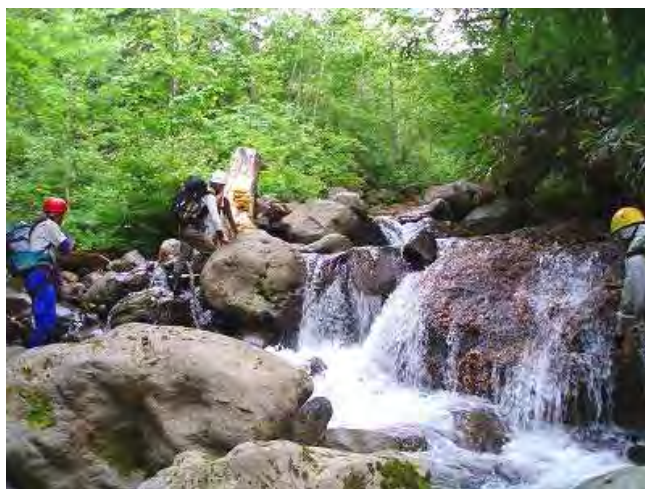
ラルマナイ川から空沼岳 7. 22

山メーリングリストの仲間が沢の本を出し沢初心者の方が本の紹介を書きました。(本のコーナーを読んでください)

著者であるganさんに7月22日、ラルマナイ川から空沼岳への遡行に参加させていただきました。メンバーはベテラン4人の中に初心者は私だけ。

笏湖へ向かう国道を歩き、左から恵庭からの道道が入るところが林道入り口です。

山水橋の標識があり左岸を進み、右岸に渡り程なく再び橋を渡るが、その川が370三俣の左俣です。



入渓1時間ほどで、小滝とゴルジュが美しい。岩盤の小滝の下の釜の水がまた美

しい。私は必死でついていくのですが、ganさんは忍者のように身のこなしがすばやい。さすがです。赤い岩盤のナメが快適ですが、足の運びがどたどたという感じで、何度も転んで、手足が青あざだらけになりました。30mの岩盤のナメや、苔むした滝など、思いがけない出会いがあり札幌近郊に、こんな素晴らしい沢があることを教えてもらい感激でした。

突然、前方が開けて空沼(からぬま)が姿を現しました。



誰も入ったことがないようなまさに秘境でした。沢の魅力ってこんなところにもあるんですね。そこからが大変。2時間の藪こぎがつかったです。Sさんが、前を歩き本当はものすごく早く歩く人なのに私のために藪が顔をたたかないように待っていてくれるのですから、弱音を吐くわけにはいきません。歩き始めて7時間50分、ようやく空沼岳の山頂に立ちました。沢を始めるには体力が必要だなあと実感しました。それでも誕生日前日にいい記念になりました。

タイム 5:24 370三俣左俣～11:40 源頭～12:30 1200稜線 13:14 空沼岳山頂 14:09～17:00 登山口

藻琴山と摩周岳 6. 24～25

6月24日札幌から5時間かかって、小清水に。登山教室のアシスタントとしてこの日は、足慣らしで藻琴山に登りました。



残念ながら、眺望はなく、屈斜路湖は姿を見せてくれませんでした。屏風岩は、ハクサンイチゲの群落が素晴らしかったです。チシマザクラもまだ咲いていました。

25日は快晴。摩周岳は展望台からも青い湖面を見せていました。第一展望台からのスタート。歩き始めてすぐに笹藪が深い。まるで刈られていないようです。しばらくすると展望が開けますが、笹やぶこぎが何度もあり、やぶ蚊とダニに悩まされながら歩きました。

でも眼下に摩周湖の神秘的な美しさに感激！そのたびにカメラのシャッターを切りながら進みました。湖面に山がきれいなシルエットを描いていました。雲が湖面に映った姿も詩的でした。

だらだらした尾根歩きから、西別岳分岐から頂上に近づくにつれて急斜面で汗が噴出します。頂上からの眺めも最高！どっしりとした雄阿寒岳、斜里岳が望め、静かな山を満喫しました。ウコンウツギ、ハクサンチドリ、ノビネチドリ、チシマザクラ、チシマフウロがいっぱい。

花の種類は藻琴山のほうが多いようです。写真をとりながらゆっくり歩いて登り3時間。下りは2時間半でした。私たちは12人のグループ。

出会ったのは5組だけでした。外国人のカップルの女性はノースリーブ。私も半そで、蚊に食われて大変でしたが笹藪を越えてきた人とは思えないほど爽やか。流暢に「こんにちは」と挨拶して、あっという間に登り、下っていきました。

私たちが泊った藻琴山荘の野趣あふれる露天風呂は絶品。熱い源泉も良かったです。



クルマユリ



タガネオミナエシ

2006年7月20日

北海道民医連新聞 (毎月5、20)

新刊紹介

岩村和彦著

ganさんが廻る
北海道の沢登り

未知との遭遇に歓声



北海道の沢の魅力満載の本が出ました。インターネッ卜上の「北海道の山メーリングリスト」への投稿をまとめたもので、私も沢のぼりの臨場感を楽しみにしていた読者の一人です。

著者は沢ガイドの本ではないと断っていますが、札幌周辺から日高、道南、知床までの26ルートを地図、写真とともに紹介し、沢登りの面白さ、魅力がふんだんに語られています。

沢登りの面白さは、未知との遭遇といえます。滝やナメ、釜、淵、ゴルジュなど一つとして同じものはない。沢にドボンのときもあれば、ザックを浮き輪代わりにして泳ぐこともある。沢登りは行程そのものの面白さだから、たとえ途中で引き返したとしても、その魅力はいささかも色褪せないと記しています。チームワークを発揮して、悪戦苦闘しながら沢にはまっていくさまが、臨場感とユーモアあふれる文章で伝わってきます。

私も沢初心者。所属する山岳会の山行でイワウベツ川・盤の川から羅臼岳の沢を昨年秋季に体験しました。エメラルドグリーン色の沢や滑滝の美しさに息をのみ、幅50m、長さ150mの極状の流れが目に見え鮮やかに残っています。そのとき偶然同じコースを歩いていたのが著者でした。それで、本書のイワウベツ川の項に私も登場します。「沢に縁のなかったみなちゃんがつっかり遅い沢屋に変身して、同慶の至りだ」と。著者はどこの山岳会にも所属していませんが、気さくな人柄で人気があります。多くの山、特に沢に縁のなかった人にこそ読んでもらいたいと思います。

著者は「山のトイレを考える会」の副代表として、山の環境問題にも積極的に取り組んでいます。

(樋口みな子)
(共同文化社・2100円)

本 Books

『君の星は輝いているか』—世界を駆ける特派員の映画ルポ
伊藤千尋著 シネ・フロント社 1600円+税

世界65カ国を現地取材したジャーナリスト伊藤千尋さんが「シネ・フロント」誌に連載してきたルポルタージュが一冊の本になりました。

著者は『心して「辺境の地」を目指した。南米の南端や北極圏など大陸の端をワクワクしながら訪れた。政治や経済の中心地よりも、こうした地に生きる人々の人生を伝えたいと思った。』とあとがきにあるように困難

な状況の中でも希望を失わずに生きる人々の姿を映画を通して伝えていて、映画をより深く理解できました。

キューバの英雄として親しまれているチェ・ゲバラ。「モーターサイクル・ダイアリーズ」では医学生のカスタロが、友人とオートバイに乗り、南米一周のたびに出た物語でした。ときにずっこけ、ときに怒り、涙と笑いに満ちていた人生だったことを知り、より身近な存在に思えました。著者自身も学生時代にキューバのさとうキビ刈りのボランティアをしたり、ロマ（ジプシー）と共に旅をしたりとさまざまな体験をしているのです。その行動力と感性がすてきです。観てない映画も多数ありますが、私自身もアメリカ映画より辺境の地で作られた映画にとっても惹かれます。著者がルーマニアで出会った少年の言葉が印象的。「誰もが自分の星を持っている。見ろ、あそこで一番輝いている、あれが俺の星だ」と。迫害をものともせず1500年を生き抜いてきた民族の誇りが伝わってきます。自由を謳歌しているようで不自由なのは私たち日本人かも知れません。自由と民主主義を求めて闘う民衆の力強さに励まされました。

映画も好き。旅も好き。山も好き。もう若くはないけれど、私もいつか辺境の地を旅したいと思いました。



エゾシオガマ



2006年6月20日 北海道民医連新聞

新刊紹介

加藤多一・文 早川茂章・絵

ホシコ―星をもつ馬

馬に寄せる愛惜の思い



額の白斑が星の形をした馬ホシコと、少年コウの物語です。

人間のことは理解する賢くて、めんこいホシコはコウの宝物でした。やがて18歳になったコウに出征命令が来ます。雪がどんと降

つた朝でした。馬そりを曳くホシコは、コウを乗せて鉄道駅に向かう途中、根っこになって動きません。コウとの別れのシーンが悲しい。

大砲や荷物を引く軍馬として多くの馬たちが中国大陸へ渡りました。優良牝馬だから戦地に行かなくてすむはずだったのに、ホシコの美しさが運命を変え、ホシコも中国大陸に。村人たちは、ホシコがきつとコウ

を連れて帰ってくると願っていました。

著者はあとがきで、中国大陸へ何十万頭と渡った馬が、ただの一头も生きて帰れなかったことを、いつか一冊にしたいという思いがあつたと述べています。著者の馬に寄せる愛惜の思いが胸に迫り、静かに戦争のむごさを伝えていきます。

早川さんの挿し絵が素晴らしく、加藤多一さんが原画を見た日、震えるような声で「すごいね」を連発したというのですから、本文だけでなく、诗情あふれる早川さんの絵に、是非多くの人に出会って欲しいと思います。(樋口みな子) (童心社・1200円+税)

映画

「ココシリ」 中国。監督 ルー・チューアン

「青い山々」という意味の海拔4000mの高さに位置する無人地帯「ココシリ」は中国最大の動物保護区です。チベットカモシカの生息地ですが、その毛皮が高値で売れるため、20年の間に100万頭から1万頭に激減。



1990年代、チベット族の有志たちが山岳パトロール隊を結成して密猟者との闘いが始まります。金もない、人手も足りない、銃もない、隊員たちは1年も無給だ。

しかし美しいものを守ろうとする誇りが顔に刻まれて清しい。パトロール隊員も密猟者も普通の人々。共通しているのは貧困です。満天の星に感動し、陽気に歌い踊り、別れのときは、互いの無事を祈り、黙々と行動する男たち。

密漁からカモシカを守る無償の行為に命を落とした人たちを記録したいという、監督の願いが結実した力作です。

流砂が人を飲み込み、ユキは全てを凍らせる自然の猛威に圧倒されました。累々と並べられたカモシカの死骸は無残で、怒りで心が震えました。

『グッドナイト&グッドラック』 米 脚本・監督 ジョージ・クルーニー



実在したCBSのニュースキャスター、エドワード・マローと彼を支えるテレビ局スタッフが、1950年代、マッカーシー旋風と言われる赤狩りに敢然と立ち向かって行きます。ドキュメンタリータッチで描かれ、当時を再現させて臨場感がありました。政界や、テレビの上層部からの圧力に屈しなかったニュースキャスターがいたことに改めて、マスコミの役割を考えさせられました。

本当に伝えて欲しいことが伝わってこない今のニュース。

マローは「テレビの娯楽化は退廃と現実逃避だ」と今の時代をぴったり言い当てていて、テレビのあり方を問いかけています。マローの痛烈な言葉を是非、観て聴いて欲しいと思いました。



購読料をありがとう 5. 26~7. 21

池田理恵子(札幌市) 新井喜美子(北広島市) 加藤多一(長沼町) 深尾加那(札幌市) 熊坂政晃(八王子市) 五十嵐憲子(江別市) 太田肇・朋子(鎌倉市) ヒマラヤ圏狭サパナ(札幌市) 則末尚大(旭川市) 宮津公一(品川区)

カンパも含めての方

三田英二(札幌市) 3,000円 小栗宏(枝幸町) 3,000円 塙とよ子(札幌市) 5,000円 匿名(加賀市) 10,000円 佐藤文彦(上川町) 5,000円

福原正和(札幌市) 7,000円と本(君は輝いているか) 岩村和彦(著書)

カンパも含めて48,000円は、印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

